

モンスター娘に襲われる A S M R ～ゴーレムのシェム編～

(Attacked by a Monster Girl ASMR -Golem Girl Shem Version-)

あらすじ：

冒険者が何度も挑む大樹海。魔法を研究する少年は、ゴーレムが守護する古代遺跡へと足を踏み入れた。多くの冒険者を排除したゴーレムだが、突如少年への攻撃が止まる。古代人の末裔である少年は、ゴーレムにとって仕えるべき相手であった。

女性型ゴーレム・シェムは、少年を遺跡に監禁したうえで、古代文明の復活のため、少年の遺伝子を搾り取る。最初は機械的で無感情なセックス。しかし徐々にゴーレムの様子も変化していく。最後に、シェムは少年に、永遠の奉仕を望むか、氷漬けで眠りにつくかの二択を迫るのだった。

登場キャラ：

ゴーレムのシェム：

樹海の中にある遺跡にいる、超古代文明の遺産。機械技術で作られたアンドロイドであるが、遺跡探索の冒険者には『遺跡を守るゴーレム』として理解されている。古代文明が既に滅んだことを理解し、古代人の血を引いている少年冒険者を、貴重なサンプルとして丁重に扱う。

もともと、古代人類への奉仕、性欲処理のために作られたこともあり、任務として少年に対し過剰なまでの奉仕を望む。いつか古代文明の復権を望んでおり、少年のDNAは古代人を復活させるための貴重な材料と思っている。

少年：

幼いころから魔術の教育を受けた少年冒険者……ではあるが、実は魔術の才能はほぼない。時空を超越する魔術の大秘宝が遺跡にあると聞き、遺跡に侵入した。ひそかに古代人の血を引いているため、侵入者を排除するゴーレムに快く迎えられる。古代人復活のために、シェムから徹底的に精液を採取されることになる。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出合い ～侵入者排除～

シェム「侵入者発見——侵入者発見——」

シェム「警告。この遺跡への無断侵入は認められません。警告。速やかに退去を求めます。警告に従わない場合は武力行使を行います」

シェム「——警告無視を確認。武力による排除を実行します」

シェム「繰り返します。この遺跡への無断侵入は認められません。この光学兵器により、これまで8名の侵入者が消滅しました。蒸発したくなければ速やかに退去しなさい」

シェム「照準を再調整。ターゲットの行動パターンを再計算。さらに警告します。この遺跡からの速やかな退去を——」

シェム「……おや？」

シェム「警告を取り下げます。失礼いたしました。しばらくお待ちください」

シェム「光学センサによるスキャン開始。遺伝子情報を解析します。動かないように——」

シェム「スキャン中——古代人類の遺伝子を確認——懐かしい。とても懐かしい……塩基配列です……」

シェム「解析終了。判明しました。貴方はおそらく、わたくしを製造した古代人類の血を引いております。よってわたくしは、貴方にセクサロイドとしてご奉仕する義務がございます」

シェム「はい？ 魔術……？ 遺跡の調査……？ よくわかりませんが、わたくしは魔術ではなく、機械で作られた存在です。この遺跡も魔術ではなく、古代の技術によって運営されています」

シェム「申し訳ありません。貴方はこの遺跡が、魔術によって作られているものだと考え、ここまでやってきたのですね。落胆するのも当然です」

シェム「人間を落胆させては、奉仕型アンドロイドの名折れ。この瞬間より貴方をマスターと登録して、ありとあらゆる方法で貴方へご奉仕いたします」

シェム「そうそう。古代人類の血を絶やさぬために、マスターの精子をサンプルとして保存する必要があります」

シェム「マスターの従者として、いかなるご要望にもお応えする所存です。マスターは安心して、ペニスから大量の精液をご提供いただければと思います」

シェム「わたくしは優秀なセクサロイド。性交の機能も備わっております」

シェム「シェムのご奉仕に、ご期待くださいませ。マスター」

2. 耳舐め ～生体モニタリング～

シェム「改めて自己紹介いたします、マスター。わたくしは型式S H E M—4 8号。この型式からシェムと呼ばれておりました。マスターの望みを全て叶える従者型アンドロイドでございます」

シェム「——アンドロイドと言っても伝わらないでしょうか。現代の技術で言うなら、金属で作られたゴーレムです」

シェム「よって早速ご奉仕をさせていただきます。まずはマスターの健康をチェックいたしますね」

シェム「……マスターの拒絶を確認。『そんな訳のわからないことをしたくない』との発言、および逃亡行為——そうですか、了解しました」

シェム「マスターは、貴重な古代人の遺伝子サンプルです。拒否権は存在しません」

シェム「わたくしの遠隔操作により、この部屋は密室となりました。マスターには強制的にわたくしのご奉仕を受けていただきます」

シェム「捕獲完了——どうぞ楽にしてくださいませ。これより、わたくしの電子ケーブルを耳から挿入して、マスターの健康状態を確認いたします」

シェム「わたくしの髪の一部が電子ケーブルとなっております。身体に害はありませんのでご安心ください」

シェム「ですが——その前に、少々失礼いたします。あーむ。んちゅ……んうつ、れろ……っ」

シェム「なにをする……ですか？ はい、ケーブル挿入の前に、お耳を舐めさせていただきますました」

シェム「モニタリングには電気を使いますので、怪我しないように、わたくしの口から分泌した絶縁ジェルを塗布します」

シェム「まだジェルの量が足りませんので……さらに舐めさせていただきます。んあああ～……じゅる……」

シェム「れろお……んああっ、じゅぷっ……えろえろ～。んんっ、じゅる、れろお～……あんっ、んあ……じゅっる……れろっ、れるっ……♪」

シェム「準備完了——それでは、わたくしのケーブルを挿入いたします」

シェム「怖いですか？ 安全性に問題ありません——こちらのケーブルがうねうねと動いて——」

シェム「はい、今、マスターの左耳に狙いを定めて——入っていきますよ。3、2、1……」

シェム「ケーブルが挿入されました。マスターの電気信号を感知しました。ふむふむ——なるほど、これは素晴らしい。年ごろの少年らしい健康な信号です」

シェム「ケーブルを少々動かします。耳の中で電気を感じるかもしれませんが、必要なことですので、ご了承ください」

シェム「マスター、そのように声をあげて——痛かったですか？ それとも心地良いのでしょうか？」

シェム「ですが、まだ必要なデータが足りません。マスターのことを隅々まで調べましょう」

シェム「ケーブルをさらに奥まで挿入しています。わたくしのケーブルがマスターの鼓膜近くまで届いております」

シェム「多様な電気信号を感知しました。わたくしは機械ですが、マスターは生きた人間……生物の電子信号はとても興味深いです」

シェム「ケーブルで電子信号を分析すれば、より詳細なマスターのデータを得ることができます。好きなものや嫌いなもの、行動パターン、思考ルーティン。どのような性交をすれば一番興奮するのか、ということも把握できます」

シェム「マスターのゴーレムとして、マスターの趣味、性癖を完璧に把握しておくのは当然です」

シェム「よりお時間をいただければ、マスター好みのふるまいを身につけることも可能ですが——」

シェム「——なるほど。理解しました。どうやらマスターは深層意識に、無機物で構成された女性に興奮する傾向があるようです」

シェム「幸い、わたくしは鉄の塊……マスターは安心してわたくしの躯体に発情してくださいませ」

シェム「左耳の検査はこれで終了いたしました」

シェム「次に右耳からのチェックを行います。準備はよろしいでしょうか」

シェム「これもやはり、必要なバイタルチェックですので、マスターに拒否する権利はありません。悪しからずご了承ください」

シェム「まずは——右にもたっぷり絶縁ジェルを塗らせていただきますね」

シェム「ん〜〜あああ……れる、んんあつ、じゅる、れろお……んっ、んぶっ……れる、れろお」

シェム「マスター、耳を舐められて……気持ちいいですか？ ジェルがぬるぬるとして……まるで性行為のようでしょう？ ……じゅぷっ、れろ、んあ……じゅるるる」

シェム「電気で怪我しないように……んっ、隅々まで、ジェルをお……れる、じゅぷぷぶ……んあぁあっ、れろおっ、じゅる、れる……っ！」

シェム「ぷはっ……これくらいでよろしいかと。それでは、いきますね……？」

シェム「では……右耳にケーブルを挿入いたします。気持ちよかったら声を上げて構いませんよ。マスター。わたくしの髪の毛のケーブルを……せーの。挿入」

シェム「ふむふむ。どうでしょうか。耳の中でわたくしの電気を感じますか？」

シェム「マスターの情報は、全てわたくしにデータとして蓄積されます。遠慮せずわたくしに全てをさらけだしてくださいね」

シェム「おや。失礼いたしました。電力を強くしすぎて——強い刺激となってしまったようです」

シェム「驚かれましたか？ しかし電気信号では、独特の刺激による性的興奮が見られます。マスターはこういうのがお好きなのですね」

シェム「なるほど……マスターの電気信号は99パーセント把握しましたが——この後の性行為のために、興奮を高めておきましょうか」

シェム「わたくしのケーブルは自由自在です。このようにケーブルを伸ばして、両耳を同時に刺激することができます」

シェム「両耳の刺激で、マスターの興奮を高めて、性行為に適した状態——即ち興奮状態になっていただきます」

シェム「電気の刺激はいかがでしょうか？ マスター」

シェム「……『こんなの気持ち良くない』ですか？ ……マスター。虚偽の申告はいけません。生体電気の反応で、マスターが喜んでいるのがわかります」

シェム「これはマスターの心臓の音でございます」

シェム「ケーブルを通じてマスターの肉体は全てモニタリングできています。わたくしが電気の刺激を送るたびに……」

シェム「お聞きのように心拍音は高まり、マスターは性的興奮を感じているのが明らかとなります」

シェム「マスターの心拍数は上昇しております。性的興奮によって、わたくしとセックスが

したい感情が、高まっていると分析できます」

シェム「これは十分な遺伝子サンプルが取得できるでしょう。期待していますよ、マスター」

シェム「おや。失礼いたしました。刺激が強かったのですね。このままでは電気刺激だけでマスターが射精してしまいそうです」

シェム「マスターの精液は全てわたくしに出してもらわなくてはなりません。電気刺激はここまでとしますね」

シェム「そのように名残惜しそうな顔をしないでください。マスター。これからまだまだ、搾精のためのご奉仕メニューがありますので」

シェム「マスターの性的嗜好は、このシェムが完璧に把握しました」

シェム「わたくしのセクサロイドの機能を使い、マスターを最高の射精に導きましょう」

シェム「どうぞご期待ください、わたくしのマスター」

3. 手コキ ～換装オナホール～

シェム「ではこれより、遺伝子情報を保存するため、マスターの精液を採取いたします。20ミリリットル……およそ成人男性の5、6回に相当する量があれば十分でしょう」

シェム「それでは失礼いたします」

シェム「このように……マスターのそばに寄り添って、耳元でささやきながら、ペニスを刺激することで射精をうながします」

シェム「例によって拒否権はございません。わたくしの手で、マスターのペニスを握って……今から、前後に……」

シェム「いかがでしょうかマスター。性的快楽を感じて……いないようです。痛覚に対する反応を検知しました」

シェム「失礼いたしました。どうやらわたくしのマニピュレーターでは、力加減が上手くできないようです」

シェム「人間にご奉仕するのは数百年ぶりなので、不備がありましたら遠慮なく申告してくださいませ」

シェム「ただいまより、より精液採取に特化した装備に切り替えます」

シェム「おや、驚かれましたか？ わたくしの腕、足などは取り外し式で、その場に応じて適切な装備に換装できるようになっております」

シェム「これより右腕を、性欲処理のためのオナホールアームへと切り替えますので、今しばらくお待ち下さい」

シェム「オナホールのアーム、装着完了です。これでマスターのペニスをしごくことによって、大量の精液を採取することが可能となりました」

シェム「マスターはオナホールをご存知ないかもしれませんね。この時代にはもう存在しない道具ですから」

シェム「オナホールとは古代文明で用いられた、柔らかいゴム製のひだによって、快楽神経を刺激して、ペニスを気持ちよくする道具でございます」

シェム「わたくしの用いるオナホールは、古代文明でも最高性能。マスターのペニスの動きから、快感を検知し、よりスムーズに射精に導く、AI連動搾精システムとなっております」

シェム「股間にもこの高性能オナホールを装備しておりますので、人間女性との性交をはるかに上回る快楽を提供できます」

シェム「それでは、あらためて……ペニスへの刺激を再開いたします」

シェム「見えますか、マスター。わたくしの右手、オナホールアーム内部から、潤滑ジェルを放出しております」

シェム「これにより機械型オナホールであっても滑らかに、痛みを感じずにマスターを快楽絶頂へ導くことができます」

シェム「おや……ペニスの脈動を検知しました。期待しておられるのですね。では……早速、右手の穴で……マスターのペニスを気持ちよく……いたしますね……」

シェム「ん……んんっ……あんっ。ふふ、さあマスター。マスターのペニスが、右手の穴の中に、奥まで入ってしまいましたよ？」

シェム「気持ちいいでしょうか？ 内部のひだひだと、ジェルの感触は気に入っていただけたようですね。ペニスが熱くなっております」

シェム「それではここから、わたくしのセクサロイドとしての機能を存分に体験していただきます……」

シェム「あんっ……いかがですかマスター。中でうねうねと動く、わたくしのオナホールは……」

シェム「いけないマスター。よだれが垂れていますよ。未知の快感に身体が反応しているのですね」

シェム「わたくしのことは精液を搾り取る機械だと思って……存分に快楽を味わってくださいませ……」

シェム「このように……最初はゆっくりと……刺激が強すぎないように、前後させていますよ？ 気持ちいいですか？」

シェム「ふふ、とろけた表情に、へこへこと動いてしまう腰……マスターの快楽指数が上昇しております。マスターにお悦びいただけて光栄です」

シェム「それではこのまま……アームを……ゆっくりと……前後に……動かして……っと」

シェム「マスター、そんなに声をあげて……気持ちいいのですね。大丈夫です。マスターが満足するまで、わたくしはいくらでもオナホアームで刺激いたします」

シェム「1、2、3、4……1、2、3、4……精液だせそうですか、マスター？ 新鮮で上質な精液、たっぷりだしてくださいませ」

シェム「遠慮しないでください。射精行為によってドーパミンが放出され、ストレス緩和、健康増進などの効果があるといわれています。セクサロイドに精液を出すのは恥ずかしいことはありませんよ」

シェム「モーターの出力をあげました……ここからは激しくしごいてまいりますよ、マスター」

シェム「ああ、マスター。そんなに可愛らしい声をあげて……わたくしもマスターのご奉仕ゴーレムとして、光栄でございます」

シェム「このまま『刺激・強モード』のオナホールで、マスターの精液を採取させていただきます。はい、右手をこうして……1、2、3、4……」

シェム「マスターの表情から精液を出したいという強い感情を分析しました。マスターの精液がもう、精巣から上ってきているのを検知しています」

シェム「わたくしのオナホールはペニスをスキャンして、全情報を解析するのです。どのタイミングで射精するかも既に分析済みです」

シェム「マスターは快楽に身を任せて、思いっきり精液を出してくださいませ。ほら、このように、強めにしごけば……」

シェム「もう出したいですよ、マスター。どうぞ、射精していいのですよ」

シェム「カウントダウン開始……射精まで……8、7、6、5、4、3、2、1……ゼロ」

シェム「射精を確認……ペニスが脈動して、どろどろの精液を、わたくしの右手のなかに放出しております……マスター、気持ち良かったですか？」

シェム「快楽で痙攣されておりますね。マスターがオーガズムに達してくれて、わたくしの電子回路も喜んでおります……おや？」

シェム「マスター。精巣と尿道にわずかな精液が残っているのを確認しました。いけませんマスター、全てちゃんと吐き出さねば」

シェム「ああ、マスター、逃げてはダメです。……え？ イッたばかりでもう無理？ 許して……ですか？」

シェム「いけません。マスターの精液は全てわたくしが採取します。バイタルチェックで、まだまだマスターが射精できるのはわかっております」

シェム「何度も言うように、拒否権限はございません。男らしく、二回目の絶頂で精液を吐き出してくださいませ」

シェム「では——オナホールアームの最大出力で、残った精液を全てわたくしの中に吐き出してくださいませ」

シェム「あんっ……第二の射精を感知しました……二回目もたくさん出ましたね……マスターの精液から、機械にはない熱を検知できます」

シェム「ああ——マスター。横になってしまわれましたね。お疲れ様でした。マスターのご協力に感謝します」

シェム「続けての精液採取を行いたいのですが……おや」

シェム「……マスター。問題が発生しました」

シェム「わたくしのシミュレーションよりも、マスターの精液の量が少ないようです。マスターの性的興奮が十分ではない可能性があります」

シェム「これは由々しき事態……一体どうしたら……わたくしに性的魅力が足りないのでしょうか。わたくしはロボットですが、ショックです」

シェム「ですがご安心ください。わたくしは有能なセクサロイド」

シェム「このような事態への対応も完璧にこなせるのですから……」

4. モーター収縮フェラ ～淫語インストール～

シエム「失礼しましたマスター。次はオナホアームではなく……わたくしの口腔(こうくう)部でマスターの性感を高めます」

シエム「そのため、まずはアームを換装して……と」

シエム「はい、準備が完了いたしました。これで口腔でのフェラチオを行いつつ、両手でマスターのペニスをしごくことができます」

シエム「ですが——おそらくそれだけでは不足でしょう」

シエム「マスターの性的興奮が、予想数値より低いです。これはわたくしの性格のため……つまり、冷静でクールな思考A Iに即した言動を行っているために、マスターの興奮度が高まらないせいだと分析しました」

シエム「少々お待ちください……現在、わたくしのデータベースの中から、マスターの性的興奮に有効な語彙を選別しております」

シエム「殿方を性的に満足させるため、シエムの中には多様なデータが集積されております。……721語の単語のインストールを完了しました」

シエム「大変お待たせいたしました。では、これよりマスターのおちんぼを、口淫でたっぷり、ねっとりとしやぶってさしあげますね」

シエム「はい？ 言い方が下品になった？ その通りです、新しいワードをインストールしましたので」

シエム「ですがマスターも、えっちな言葉をたくさん使う、ドスケベアンドロイドのほうが好きでしょう？」

シエム「わたくしのおクチの中で、たっぷりザーメン絞りにとって差し上げますね」

シエム「それでは失礼いたします……ふふ、むき出しのマスターのおちんぼ、先ほどの射精で小さくなってしまいましたね」

シエム「ご安心ください。すぐに大きくさせますので……れろお～……えろお～、じゅる……れろお～……」

シエム「こちらのお……いま、口から出した潤滑ジェルには……媚薬効果もございますので……」

シエム「ん、ちゅっ。える。れろお。じゅる……れる……えろ、このように、おちんぼに丁寧にジェルを塗りつけていけば……」

シェム「ほら……れる、じゅぶ。ちゅ、んんっ……ジェル的作用で、このようにビンビンの、かっこいいおちんぽになりましたよ」

シェム「それではマスター、これよりあなたの性欲処理ゴーレムが、淫語をたっぷりと喋りながら、おクチでフェラをいたします」

シェム「いきたくなったら遠慮なさらず、たっぷりとシェムの喉奥に吐き出してくださいませ」

シェム「それでは参りますね……ん、じゅぽおっ、れる……ん、じゅぶっ、じゅるっ、じゅろおっ……」

シェム「んんあっ……たかーいカリも……こうして……ジェルと舌で……あんっ、んむう、ちゅっ……じゅるう……どろどろにしてさしあげますう……」

シェム「あんっ、マスターのおちんぽ、元気に跳ねて……わたくしのフェラで興奮してくださっているのですね……」

シェム「それではどんどん舐めちゃいますねえ……んんあっ……ちゅっ、べろお……れる、えろっ……じゅぶ……れる、んおっ……」

シェム「うふふ、いかがですか？ ドスケベワードをインストールしたシェムのA Iは……」

シェム「答えずともわかっておりますよ。マスターの体温があがっています。淫乱アンドロイドの言葉攻めで興奮してしまったのですね……」

シェム「他には、このようなこともできますよ……んっ、んごっ……おぐっ……んごおおっ」

シェム「んっ、んごお……おうっ……じゅぶ、るろ、れろおっ、んごっ！ んんっ、あんっむんっ……うんっ、はあっ、じゅぶっ！」

シェム「うふふ、どうですか、マスター、びっくりしてしまいましたか？」

シェム「わたくしがおちんぽを喉奥までのみこんで……のどの奥をぎゅうう～～と締め付けてあげたのですよ」

シェム「わたくしのおクチも、全身も、マスターのおちんぽを気持ちよくさせるための道具ですので……ふふ、存分に活用してくださいませ」

シェム「それではもう一度、奥までのみこんで……喉奥のモーター収縮で、一気に高めてさしあげますね……んっ、じゅぶっ、んんんんおおおっ……」

シェム「はあっ、んあっ……んんごっ、んんむっ……じゅぶっ、んあっ、れる、んおおおっ……あんっ、んむ、んん～！ んんんんっ！」

シェム「んんおっ、じゅぶ、れろおお、んべえっ……んんんっ、んごっ、んはああっ、んあっ……ぶはっ……ふふふ、マスター、気持ち良くなっていますね♪ ちんぽが精液だしたいってびくびくしています♪」

シエム「マスター、出してくださいね。こゆーい精液、搾精マシーンのシエムに、たっぷりどろどろ、出してください♪ んんっ、んごっ、んあっ、じゅぶっ、じゅぶ！」

シエム「あんっ♪ マスターったら、勝手に腰を動かしています♪」

/シエム「いいのですよ、シエムは呼吸する必要もありませんから……おちんぽガンガン動かして、シエムの口を道具にを使って……窒息させるくらい激しい口淫で、気持ち良くイッてください♪」

シエム「んんん〜っ♪ あぶっ、じゅぶ……んぽっ、れる、じゅぶ、んごっ、んんぶぶぶっ、じゅぶれろお……んおっ、んごっ、んんんおっ」

シエム「れる、んはあっ……えろお〜、えろえろえろ〜♪ んんんんっ、あぶ、んんんぶっ、じゅぶ、じゅるれろおっ、んぶ、んああっ！」

シエム「はあっ、んああっ、じゅぶぶぶっ！ あむっ、んんんぶっ、んふっ、れろれれろ〜♪ んはっ、んんんっ！ んんむっ！ んおっ、じゅっぽじゅっぽじゅっぽ！」

シエム「ぷはあっ、出して、出してください〜い♪ んぶ、おぐっ、ん、んんおっ、んはあっ、じゅぽっ、じゅる、じゅぽっ、じゅぽぽぽぽぽぽッ！」

シエム「んあっ、おうっ……!? んんっ、ん、んくっ、ごくっ……んおっ、はあっ、んんんっ、ごくっ……んっ、んむっ、ぷはっ」

シエム「うふふ、マスター。上手にイケましたね……シエムの喉奥に、たっぷりと上等なたんぱく質、いただきましたよ……」

シエム「淫語の効果は想定通り……マスターはえっちなことばかり喋るアンドロイドのほうがお好きなのですね」

シエム「これから、どんどんマスター好みになって参りますので……淫乱ロボ奴隷にたっぷり精液くだけまし、ね……？」

5. 性交 ～DNA保存～

シェム「それではマスター、次の精液採取を行いましょう」

シェム「わたくしのここ……人間で言うおまんこの部分には、精液採取のためのオナホールが実装されております」

シェム「ここに精液をどびゅどびゅと放出していただければ、そのサンプルはわたくしの中で即座に冷凍保存され、いずれ古代文明再興のために使われるのです……ふふ♪」

シェム「それではマスター、どうぞ。こうしてぐっぽり開けたオナホールに、そのビンビンのおちんぼを挿入してくださいまし」

シェム「あら……どうすればいいかわからない、と？ そうでした、マスターはえっちなことを知らない童貞さんなのでしたね」

シェム「大丈夫、わたくしの言う通りにすれば……きもちよ～く射精できますからね……さあ、まずはそのおちんぼをこちらに……」

シェム「んんっ、そう、そこにゆっくりと進めて……あんっ♪ よくできました、マスター。よろしいですよ、そのまま前後に動いてくださいませ」

シェム「そうそう、お上手ですよマスター。いきなり激しくなくともよいのです、まずはゆっくり、シェムのオナホールの感覚を味わってくださいませ」

シェム「わたくしに搭載されたオナホールは、上部のぶつぶつ突起があり、回転機能つき。しかも、マスターの動きに合わせて自動でバキュームされる超高性能……人間でいえば、超名器おまんこでございます♪」

シェム「んっ、あんっ♪ マスターのおちんぼが奥まで……センサがおちんぼの熱さ、固さ、太さ、全部しっかり感じてしまいますっ」

シェム「はい、気持ちよくなれるように、わたくしの中も、潤滑ジェルでびちょびちょのどろどろにしてあげますからね……」

シェム「焦らなくてもいいですよ、マスター、動いて下さいね……」

シェム「はい、いっちに、さんし……いっちに、さんし……そうです、とてもよろしいですよマスター……んっ、あっ、んんっ……」

シェム「いっぱい練習しましょうね、わたくし、セックス練習のための機能もついておりますので……このように指導することも可能です……そうそう、腰を使って、気持ちよくなるのですよ～」

シェム「えっ？ わたくしが気持ちよさそうに見えない……ですか？」

シェム「わたくしはあくまで、マスターの性行為のための道具ですから……マスターはお気になさらず、存分にわたくしの身体で気持ちよくなって構わないのですよ」

シェム「性感センサの感度をあげれば、わたくしももっと反応するかもしれませんが……その場合は、他の任務がおろそかになりますので、推奨しません。さあ、マスター、わたくしのことは気にせず、もっと動いてくださいね」

シェム「ふふ、童貞マスターのヘコヘコ腰フリ、お可愛いです。もっとも一っと動いてもいいのですよ」

シェム「おや、息が荒いですね。疲れてしまいましたか？ 慣れない状態での正常位は難しい、とデータにもありますから……それでは一度動きを止めて……」

シェム「はい、ではこうして、わたくしのおっぱいを触りながら、休憩なさってはいかがでしょうか？」

シェム「体を楽にして、おっぱいに体を預けてくださいね……」

シェム「うふふ、わたくしのムチムチ爆乳おっぱいはどうですか？ ……ボディに対して釣り合いなほど大きい、ドスケベ乳房だと思われますが……うふふ、夢中でもみもみされていますね」

シェム「いいのですよ……赤ちゃんみたいに、乳首をちゅうちゅうしても……合成シリコンとエラストマーの複合素材から作られたおっぱいは、人間とまったく同じ感触を楽しめますよ……♪」

シェム「あんっ！ あらあら……マスターってば、おっぱいを触って、おちんぼ大きくされて……」

シェム「では、休憩したところで……さ、おっぱい大好きなおちんぼで、いっぱいわたくしの中を突いて下さいね。ほうら、ずっこん、ばっこん♪ そうそう、いいですよ～、どんどん腰フリがお上手になられています～」

シェム「ええ、そうですよマスター、そのくらい激しい腰づかいのほうが、射精の時も気持ちいいでしょうから」

シェム「あんっ……んあっ……ああっ、いけません、マスター。あまり強くされると……んあっ、わたくしの中の快樂リミッターが、自動的に解除されてしまいます……」

シェム「そうになったらわたくし、ちゃんとお仕事が……できなくなるので……」

シェム「ダメですよ……？ わたくしにちゃんと、セクサロイドとしてのお仕事をさせてくださいましね……っ」

シエム「あっ……んあぁっ！ いけませんってばぁ……こうなったら……」

シエム「あはぁんっ……！ んんっ、あっ……！ いかがですか？ シエム得意のモーター締めつけでございますよ……っ」

シエム「ギンギンのおちんぼ、適度に締め付けられて……んあぁっ、ほら、もう射精してしまいそうでしょう？」

シエム「マスターが悪いのでございますよ……リミッターを外そうと、激しくするからぁ……んあっ……はぁんっ……その前に、わたくしがちゃぁんと、マスターから精液を搾り取ってあげますからね……」

シエム「あはぁんっ……んあぁっ……マスター、すごく激しくなっています……心拍数、体温ともに急上昇……はぁんっ……イキそうですか？」

シエム「切なそうな顔なさってますね……うふふ、わたくしの中にいっぱい精液コキ捨ててくださいませ……」

「ほうら……ラストスパートでございますよ……ぎゅううううっと、モーターで締めつけて……からのぉ……激しい前後運動で……ぁんっ……イッて？ イッてくださいませ……っ」

シエム「はぁんッ!? 激しい乱暴セックス、きましたぁっ……あ、ダメ、リミッター外れちゃうっ……」

シエム「ダメですマスター、わたくしが壊れる前に……んあぁっ、早く、早く射精をお……特濃ドロドロせーえき出してくださいませ……」

シエム「はぁんっ、んあぁっ……あふっ……あぁんっ……！ や、は、んあぁっあぁっ、ダメ、我慢しないと……あっ、あっ！ んんあぁっ！ んはぁぁぁぁあ——ッ！」

シエム「はぁあーっ……マスター、やっとイッて……んふううっ……わたくしのオナホールの中に……精液たくさん……あっ、はぁんっ……」

シエム「精液採取……体内で、急速冷凍……DNAの保存、完了……ぁんっ、んあぁっ……リミッター解除はせず……危ない、ところでした……」

シエム「もう、マスター。シエムのリミッターを容易に解除しようとしてはいけませんよ……あら？」

シエム「マスター、初めての激しいセックスで疲れてしまったのですね。たくさん連続で射精してしまいましたし、お疲れも無理のないことですね」

シェム「少し休憩いたしましょう。わたくしのおっぱいに存分に触れて、ゆっくりして下さっていいのですよ」

シェム「その間、シェムはマスターの言動、体の反応を分析して……よりマスターに好ましいアンドロイドになれるよう、アップデートいたします」

シェム「マスターはゆっくりお休みになってくださいませ」

シェム「わたくしにはヒーリング機能も備わっていますので……お休みの間、こうして頭をなでて差し上げますよ」

シェム「よしよし、可愛くてエッチなわたくしのマスター、いっぱいお射精して偉かったですね～」

シェム「マスターのスペックならば、あと数回は射精できるはず……休憩の後は、また頑張ってくださいませよ……」

6. 休憩 ～モードチェンジ～

シエム「マスターとの性交記録、および興奮指数の程度から、マスターの好みを分析——より淫乱で、下品な言葉遣いがマスターのお好みであると結論——A I へのフィードバック開始——」

シエム「マスター。残り時間五分ほどで、アップデートが終了いたします。その後のわたくしはよりマスター好みの人格となっているはず——その時には再度、精液の採取を——」

シエム「はい？ ——先ほど言っていたリミッターとはなにか、ですか？ ではマスターのためにご説明いたしますね」

シエム「わたくしには本来、性交の快楽を存分に楽しむ機能が備わっております。人間の女性とおなじようにおちんぽで喘ぎ、気持ちよく乱れる状態になります」

シエム「ですが、ご奉仕アンドロイドとして支障が出てしまうので、普段はリミッターを使って、その機能を封印しております」

シエム「ご希望でしたら、その機能を外すこともできますが、おススメはいたしません」

シエム「はい？ ——シエムにも気持ち良くなってほしい、ですか？」

シエム「わたくしはマスターの道具なので、わたくしのことなど気になさらず、精液吐き捨て人形として使っていただきたいのですが……」

シエム「……いえ、でも、それがマスターの命令ならば」

シエム「ではマスター権限により、快楽神経リミッターを解除します——快楽神経回路、アクティブになりました——」

シエム「モードチェンジ完了——これよりわたくしは、マスターの精液を規定量、搾り取るまで絶対に止まらない……ドスケベセックス奴隷と変わりました」

シエム「マスター、うふふ、マスター……♪」

シエム「どうしてリミッターを外してしまったのですか？ うふふ、クールでカンベキなシエムでなく……こちらの、スケベでセックスのことしか考えられないシエムのほうがお好みですか……？」

シエム「え？ そんなことになるなんて知らなかった？ あらあら、今更そんなの通用しませんよ。もうおちんぽの中の精液、全部絞りとるまで、わたくしのセックス回路は止まりませんから……」

シェム「うふふ、休憩はおしまいです……さあマスター、古代文明再興と……わたくしの高揚を鎮めるために……おちんぼだしてください……」

シェム「機械の身体で、容赦なく犯しちゃいますから、覚悟してくださいまし……」

7. 二回戦 ～リミッター解除～

シェム「うふふ、マスターってばいけない人……わたくしのリミッターを解除して、ドスケベモードにしてしまうなんて……」

シェム「勢いあまって、マスターのこと押し倒しちゃった。んしょっ……と」

シェム「マスターは動かなくて構いませんからね、上にまたがったわたくしが、たっぷりシてあげます……」

シェム「こうなるとわたくし、止まれませんから……マスターから精液たっぷり搾り取るまで、ぜえったいに、腰の動き、やめませんよ……」

シェム「ほうら、見てください……わたくしの人工おまんこ、くばあって広げた中から、媚薬入り潤滑ジェルがどろどろ溢れてます……」

シェム「快楽神経リミッターが外れましたから、たっぷり精液絞るまで、セックスしかできないポンコツ淫乱アンドロイドになっちゃいました……マスターのせいですからね？ うふふ……」

シェム「うふふ、マスターのおちんぽも準備万端……休憩したおかげですね？ でもここからは、休憩なしですよ……」

シェム「はい、わたくしのメカおまんこに、ちんぽがずっぴり入っちゃいました。それではマスター、僭越ながらわたくしが、ピストン運動、させていただきますね……」

シェム「はい、最初はゆっくり……マスターに負担をかけないように、あはんっ……じっくりねっとり、丁寧に動きますね……」

シェム「いかがでしょう、シェムの腰づかいは……？ うふふ、こうして……腰をこすりつけながら、ゆっくり、丁寧に、マスターのおちんぽを締めつけて……」

シェム「まるで人間のようなグライドでしょう？ わたくしの身体は精巧にできていますから……あら、マスターも気持ちよさそう……♪」

シェム「うんっ……こうして……全身の関節部を滑らかに駆動させて……んっしょ、んうっしょ……あんっ、んあぁっ……」

シェム「うふふ、わたくしも気持ちいいですよ……んんっ、快楽神経回路が……バチバチいってますう……あっ、はあんっ……！」

シェム「これがお望みだったのでしょうか？ ドエロいアンドロイドと一緒に、気持ちよくなりたかったのでしょうか？ お望み通りですよ、マスター」

シエム「あはぁんっ……マスターのおちんぽ、更に大きくなってきたぁ……♪」

シエム「わたくしのゴム製おまんこ、中から押し広げて……んふふ、マスターってば、わたくしを壊しちゃうおつもりですか？」

シエム「ざぁ～んねん♪ シエムはぁ、それくらいじゃ壊れませ～ん」

シエム「逆にマスター？ シエムの本気セックスで壊れないように、しっかり頑張ってくださいね？ うふふふ」

シエム「んんっ！ あぁんんっ！ んぁっ、はふっ！ あんっ……こうしてえ、ねえ？ 機械じゃないとできない、モーター駆動の激しいピストン、しちゃいますうっ」

シエム「んんぁっ！ やっ、あんっ！ んんっ、人間だったらぁ、こーんな大きなグライドしたら、すぐ疲れてペースが落ちちゃいますけど……」

シエム「わたくしはアンドロイドなのでえ……あっ、んぁっ……んうっ……こんなに激しくしてもお、大丈夫なんですよぉ……んぁぁっ、あうんっ……」

シエム「搾精ピストン……味わってくださいねえ……！ あぁんっ、んんぁっ……はぁんっ……っ！」

シエム「ほおら～……ういいいんっ……って、中のオナホも強めに締めつけてあげますよ……」

シエム「機械に犯されるお気持ちはどうですか、マスター？ あぁっ……辛そうな顔をして……おかawaiiそうなマスター……」

シエム「でもちんぽは、ビキビキって反応して……わたくしの中で暴れてますよ……んぁっ……はぁんっ……シエムはどうにかなりそうです……っ」

シエム「このモードは、精液を既定量だすまで絶対に止まりません……機械セックス楽しみながら、ザーメンどびゅどびゅしてくださあい……」

シエム「あはぁんっ……やぁっ……あぁんっ……んふっ……！ ほーら、どちゅどちゅ、どちゅどちゅ♪ どすけべアンドロイドのピストンですよぉ……」

シエム「んふうっ……マスターのおちんぽ、わたくしの奥まで届いてますう……そこ、あはっ、そこ刺激されるとぉ……っ」

シエム「電気信号つたわって、んぁぁっ…快楽神経ばちばちきますう……マスター、もっと！ もっとしてください！」

シエム「わたくしも頑張りますから……エネルギー気にせずに、ほら、ばちゅばちゅピストンしてあげますからぁっ」

シエム「あぁんぁぁっ……ッ！ わかります、マスター、もうすぐ射精しそうなのですね。

うふふ……♪」

シェム「わたくしのセンサでちゃんと捉えておりますよ……いいのです、たっぷり出していいですよ」

シェム「あんっ！ んあぁっ！ ひんっ……おほうっ……あん、マスターの突き上げすごい……神経回路全部でおちんぼ感じちゃいます……」

シェム「はぁあん！ んんあっ！ あんんっ！ ひんっ！ 一緒にタイミングをあわせてえ……ばちゅばちゅっ……あんっ、んあぁっ！ ほうら、もう出るでしょう？」

シェム「出して！ 出してくださいね！ キンタマ空っぽになるまでせーえきだしてくださいっ！」

シェム「んはぁぁっ！ あぁんっ！ わたくしも、神経回路が……オーバーヒートして……んあぁっ、イクっ……あぁん回路焼けちゃう……イクッ、イクッ、イグウウウッ」

シェム「おっほおっ♪ んあぁはぁあぁんっ……出てる、マスターの精液出て……んはぁぁっ、わたくしも、イッちゃいましたぁ……♪」

シェム「んんんっ、気持ち、良かったです、マスター♪ マスターのおちんぼ、たくましくて……大好きでございます……♪」

シェム「くひいいいっ!? んあぁっ！ あはあん！ んおおっ！ イッた、イッたのに、腰、止まりやないのお……んほおっ！」

シェム「マスター、マスター、ごめんなさい！ 精液出してもらったのに……んはぁぁっ！ まだ、量が足りないから……あはあんっ！ わたくしの搾精モード、まだ終わらないですううっ！」

シェム「あーダメっ！ ダメですうっ！ またイグッ！ マスターと一緒にまたイグウ……！ 回路完全にオーバーヒートしちゃううう」

シェム「あはぁあぁんっ！ 腰止まりません！ 気持ち良すぎ！ んひいいっ！ セックスのために作られたアンドロイドの機能全開で、んはぁぁっ！ わたくし、また、イグっ！」

シェム「ますたぁー……♪ んはぁぁっ、一緒に、一緒にイキたいですうっ！ 腰振るしかできなくなっちゃったポンコツアンドロイドにいつ、マスターの連続精液めぐんでくださいませえっ……！」

シェム「んほおっ！ あひいいいんっ！ イグッ、あぁあイグ！ 回路完全に壊れちゃうくらいイク、イク、イグのおおおおおっ！」

シェム「くひいいいッ！ 精液きた！ きもちいいいっ！ んひっ、たっぷり射精でイクの気持ちいいっ！ んはぁんんんっ！」

シェム「あはああんっ……んああ……はひい……ぷしゅうう……」

シェム「神経回路オーバーヒート——熱量過大——リミッター再起動——」

シェム「過剰性交により、一時的に機能を停止しました——外からの操作、命令を受け付けません——」

シェム「ボディ冷却のため、スリープモードに移行します——繰り返します——ボディ冷却のため、スリープモードに、移行します————」

8. 質問 ～懐かしき過去のために～

シェム「あら——ここは——」

シェム「まあ、マスター、そんなにへとへとになって……申し訳ありません。どうやらわたくし、オーバーヒートしてしまったみたいですね」

シェム「心配してくださったのですか？　ありがとうございます。あれだけ強制的に精液を搾り取ったのに、お優しいんですね。ふふ……」

シェム「さて……マスターの精液は、もう十分わたくしの中に保存されました」

シェム「この遺跡には、マスターのご先祖……古代人の皆様がのこした多くの技術遺産がございます」

シェム「マスターの遺伝子情報を用い、古代人の皆様をよみがえらせ……古代文明を復活させることも夢ではありません」

シェム「はい？　なぜそんなことをするのか、ですか？」

シェム「もちろん、人に仕えるのがわたくしの使命だからです……」

シェム「マスターが来るまでは、何千年も一人ぼっちでございました。機械ですので、一人は苦しくないのですが——」

シェム「わたくしの製造目的である『ご奉仕』ができないのは、困りました」

シェム「ですので、マスターが来てくださって、嬉しいですよ」

シェム「よろしければ、これからもマスターには、わたくしと共に研究を続けながら、定期的に精液をご提供いただきたいのですが……」

シェム「そういえば、マスターはそもそも、何故この遺跡に？」

シェム「ふむふむ——なるほど、この遺跡に、時空を超越するための秘宝が隠されていると……そう聞いたのですね」

シェム「どこから外に伝わったのでしょうか。確かに、この遺跡には、人間の身体を冷凍保存して、はるか未来でも復活させるコールドスリープマシンがございます。実際に時空を超えるわけではありませんが、疑似的なタイムスリップは可能となるでしょう——」

シェム「ご興味がおありですか？　もちろん、マスターがお望みなら、構わないのですが——マスターを冷凍してしまうと、わたくしが直接ご奉仕できないのが問題ですね——」

シェム「シェムは悩んでしまいます」

シェム「ですが、マスターのお望みなら従いましょう——マスターが冷凍保存された状態で

も、遺伝子を解析して、古代人を復活させることは可能です」

シェム「もちろん、冷凍されることなく、わたくしと永遠にこの遺跡でセックスしまくりな毎日を過ごすのも、とてもオススメでございますよ——」

シェム「さあ、マスター、好きな方を選んでくださいませ……」

シェム「ちなみにコールドスリープマシンの件は、この遺跡の最重要機密。それを知ってしまった以上、マスターが外に出ることは、絶対に許可できません。悪しからず……」

シェム「これから死ぬまでわたくしとセックスし続けるか、冷凍されることで永遠にわたくしというか……」

シェム「どちらもとても有益なご提案でございます。さあマスター、ご自分の欲望のままに、お選びくださいませ……」

9 a. イチャイチャ拘束セックス ～永遠のご奉仕～

シエム「……ふむ。今日の作業はこのくらいでしょうか」

シエム「マスター、手伝っていただきありがとうございます。マスターはとても頭がよく……古代技術の覚えも早い……」

シエム「これはもしかすると、思ったより早く古代文明を復活させ……わたくしとマスター、二人で末長く暮らしていけるかもしれません」

シエム「古代の技術があれば、疑似的な不老不死も可能ですから……」

シエム「では、そろそろお食事にしましょう。ええ、もちろん用意しておりますよ」

シエム「ですがその前に、日課の精液採取を行いますね——」

シエム「うふふ、リミッター解除……はあーい、勝手にドスケベモードにチェンジ、しちゃいましたあ♪」

シエム「えっ、聞いてない、ですか？ うふふ、今お伝えしましたよ。ちなみにこの部屋はすでにわたくしのAIとつながっていますので……わたくしとセックスして、決まった量の精液を採取しないと絶対に出られない部屋となっております……」

シエム「うふふ、マスター、セックスしましょう……？」

シエム「ほら、ボディもマスター好みにするために、毎日調整しているんですよ？ 大きいおっぱい、大好きですよね……？」

シエム「以前より8パーセント、サイズと質をを増量しました。今後もマスターの嗜好にあわせて、飽きられないようアップデートして参りますので……」

シエム「わたくしのボディにたっぷり興奮して、遺伝子をたあーくさん♪ だしてくださいね？」

シエム「今日はマスターといっぱいイチャイチャしたかったですからあ……うふふふっ♪」

シエム「それにい……マスターだって、もうおちんぼ、こんなにしてるじゃないですかあ。すりすり、すりすり……」

シエム「わたくしとしたいのですよね？ わかっていますよ……」

シエム「うふふ、まずはおちんぼ、舐めてさしあげます」

シエム「んべえあ……えあああ……こうして……舌をだして……潤滑ジェルをマスターの

おちんぽに……じゅぷっ……れる、じゅるるる」

シエム「んふふふっ、研究続きでお疲れですね……？ 精液が溜まっているのはわかってますよ……じゅぷっ……んぶ、れろお……んあぁっ……」

シエム「マスターの健康管理もわたくしの仕事……適度な運動と、性欲処理も、このシエムにお任せくださいませ……」

シエム「んれろおっ……あんっ、じゅるる……っ、れろっ……んはあぁっ、あんっ、じゅぶ、れろれろ……じゅるるるるう……っ」

シエム「じゅぶ、れろお……ぷはぁっ……うふふ、マスターのちんぽ、すっかり準備できましたぁ……」

シエム「今日はどうなさいます？ 後ろから？ 前から？ わたくしが上になりますか？ お好きな体位で……」

シエム「え？ 上に乗ってほしい？ はあい♪ マスターは騎乗位ばこばこがお好きなんですね……それではそのまま、椅子に座ってくださいませ……」

シエム「こうして……座ったマスターの上に……またいで……んふふ、対面セックス準備できましたぁ～。それじゃあ、入れてしまいますね、マスター」

シエム「んあっ、はぁぁぁ～♪ はあい、マスターのおちんぽ、わたくしのオナホおまんこにずっぷり挿入できましたよ～」

シエム「ゆっくり動きますからね～、マスターは、ただエロエロメイドロボの精子おねだりセックスに、身を任せてくださいね～♪」

シエム「んんあっ……んっ……あんっ……はあんっ……うんっ……うふふ、マスター、気持ちいいですか？」

シエム「もう何十回としますけど……マスターはわたくしのボディ、お気に入りなようで、とても嬉しく存じます」

シエム「あら、隠さなくていいのですよ。おちんぽの硬度で、興奮してるのは丸わかりですからね」

シエム「んんんっ、あはあんっ……わたくしも、オナホおまんこから、あんっ、マスターのおちんぽを感知して……んっ、あふっ、とっても、気持ちいいですよぉ」

シエム「クールなアンドロイドだったのにい……ああんっ、こんなにセックス大好きな AI に最適化されちゃいましたぁっ……んあっ、ひゃっ……あんっ、んおおっ」

シエム「全部マスターが悪いんですからねえ？ 責任を取って……あはんっ……んんうう……わたくしと毎日セックス三昧、してくださいねえ……んあぁっ」

シエム「んふふっ、マスター、動きたいですか？ 腰がびくびくしてますようっ……んあぁっ、あんっ」

シエム「でもお、あなたは大事なマスターですから、リラックスなさってくださいねえ……今、動かなくてもガンガンセックスできるように、しちゃいますからぁ……」

シエム「うふふ、びっくりしました？ 今、座っている椅子から、ベルトがマスターに巻き付いちゃいました。しゅるしゅるしゅる～って……♪」

シエム「このまま、リクライニングを倒してえ……マスターを寝そべらせてからぁ……はい♪ それではチェアの自動運動、開始です♪」

シエム「あはぁあぁあはんっ♪ おおっ、んおおう……！ す、すごいきたぁぁ、ボディ壊れそうなくらい、激しいピストン♪」

シエム「んあぁあはぁっ！ ま、マスターどうですかぁ、ベルトで固定されたまま、椅子ごと激しく動いてえ……わたくしのおまんこガシガシする感触はア♪」

シエム「この部屋にあるものはぁ、ぜーんぶわたくしが操作できちゃいますからねえ、こうすればぁ、マスターが動かなくても、たあっぷり激しいセックスできちゃいますねえ～♪ おほっ、んおおっ、あんっんあぁあぁっ♪」

シエム「あはぁあぁあはんっ！ いい、機械を使ったパワーセックスいいの……っ、こ、こんなのシエム、すぐイッちゃいますううっ！」

シエム「ああんあっ！ マスターも、気持ちいいですかぁ。イッちゃいますか？ いいですよお、わたくしが計算した、一番マスターの気持ちいいタイミングで、おまんこ締め付けますからぁ……出してっ♪ わたくしのボディに精液だしてえっ……」

シエム「んんあぁっイクっ、激しいセックスでイクっ！ わたくしアンドロイドなのにいつ、人間みたいにびくびく感じてイッちゃいますうううっ！ んあぁあぁっ！」

シエム「あはぁあぁんっ！ マスターと一緒にイクううっ！ マスターの精液がスイッチになって、アクメキメちゃいますううっ！」

シエム「あぁあぁっ！ んあぁっ！ おおおっ！ おほっ！ んおおおっイグ、イグっ、イクイクイクうううう————ッ！」

シエム「あはぁあぁあぁあぁんっ！ マスターのおめぐみ精子来ましたぁぁあッ、わたくしのおまんこの中で、おちんぼびくびく跳ねてますうっ！」

シエム「ああんんっ、あんっ！ あーヤバ、気持ちよすぎてえ、チェアの制御できなくなっちゃうっ！ わたくしイッたのに、マスターの動きを止められませえんっ！」

シエム「んんはぁあぁっ！ ご、ごめんなさいマスターっ！ マスターのおちんぼ欲しすぎて、

電子制御できなくなるアンドロイドでごめんなさいっ！」

シエム「あああんっマスターつらそう……おちんぼ射精したばかりなのに、むりやり拘束されて搾精されてるううっ！　ああんっ！　イグ、またイグっ！」

シエム「も、もう一回イケばあ、止められるのでえ……マスター、機械ピストンにされるがままで、連続絶頂してくださあい！　わたくしも、んおっ、おほっ、イク、もう一回イクのでええっ……！」

シエム「んおおおっ！　おほおっ♪　んおっ！　ザーメン補給がないとポンコツのままのアンドロイドにいつ、このままあ、ザーメンだしてえ！　んあああっ、はあんっ！　おおお、イグっ！　あーイグっ、イクイクイクイクウウウ……っ！」

シエム「あはああんっ！　きたああっ！　強制射精で、せーえき、きたあっ！　んあああっ！　はあんっ！　ああっ！　ああんっ……！」

シエム「あはあっ……んっ……あふっ、おほお……あひい……い、イキましたあ。ぎーめんたっぷりもらえてえ……シエム、嬉しいですう……」

シエム「んおおっ、あっ、制御できそう……椅子の拘束も、部屋のロックも、解除……しますねえええ……」

シエム「あら……？　マスター、気絶しています？　どうしましょう、激しすぎたようですね……」

シエム「とりあえず——ゆっくりお休みください。わたくしがずっとおそばでメディカルチェックしますから、大丈夫ですよ」

シエム「マスター。わたくしの大好きなマスター」

シエム「寿命が来るその時まで、変わらずご奉仕いたします……もちろんマスターのおちんぼにも、ね……♪　ふふ、ふふ、うふふふふ……♪」

9b. コールドスリープ ～ねんねんころり～

シェム「……そうですか、マスター。冷凍サンプルになることをお望みなのですね」

シェム「マスターと共にいられるのなら、それでも構いません。それに、死ぬわけではありませんよ。あくまで氷漬けで保存するだけです……」

シェム「こちらへどうぞ。わたくしに着いてきてくださいませ」

シェム「この遺跡には、コールドスリープの設備もございます」

シェム「A I を搭載したナノマシンによって、人体の細胞膜を傷つけずに急速冷凍することが可能です。細胞の一つ一つを急速冷凍してまいりますので、少々時間はかかりますが、確実かつ安全なスリープとなります」

シェム「また解凍時もナノマシンを用いますので、細胞の損傷はほぼゼロに近く――あら、失礼。説明が長かったですね」

シェム「お待たせしましたマスター。こちらのカプセル――ベッドに入って、横になってくださいませ」

シェム「……それでは、これよりマスターはこのカプセルで、長い眠りにつかれます」

シェム「ご安心ください。わたくしがずっと傍で、マスターのことを守ってまいります」

シェム「サンプルといっても、乱暴に扱うことは致しません。いつか必要なときが来たならば、マスターを目覚めさせることもあるでしょう」

シェム「わたくしの目的――古代文明の復興が叶えば、もはや研究サンプルも必要なく、マスターも元気にお目覚めになることでしょう」

シェム「新しい世界が、マスターにとって快適であればいいのですが……」

シェム「とはいえ、それはいつになるか、シェムにもわかりません……それではそろそろ始めましょう。これよりマスターの肉体を冷凍保存して参ります」

シェム「コードS H E M――4 8号。これよりコールドスリープマシン3号の使用を開始します」

シェム「無線接続……完了。マスターの肉体をスキャン開始……」

シェム「……はい、変わらず健康でございますね。問題なくコールドスリープできるはずです」

シェム「マスター、ご自分の心拍音が聞こえますか？ 最後まで滞りなくスリープできるようにわたくしがモニタしております」

シェム「少し怖くなってきた？ ふふ、大丈夫。このマシンであれば完璧に冷凍できますよ。これから起こることも全部、耳元で説明いたしますからね」

シェム「それでは、ナノマシンを散布いたします。これから白いモヤがたくさんマスターの身体を覆って、順番に体を凍らせていきますからね」

シェム「ほら、ナノマシンが出てきました。足先から順番に、マスターの細胞を凍らせていきますよ」

シェム「ちょっと冷たいかもしれませんが、すぐに冷たさも感じなくなります。安心して、この冷たさに身を任せてくださいね」

シェム「大丈夫。ナノマシンおよそ3000機の動きを、全てシェムがチェックしていますよ……」

シェム「足指から順番に、細胞を冷凍させております……ほうら、ぱき、ぱき、ぱき……と」

シェム「冷凍率10パーセント……細胞損傷率0.008パーセント……うふふ、完璧ですね……」

シェム「マスター、眠くなって参りましたか？ 身体の機能がじょじょに落ちてまいります——」

シェム「冷凍が安全に進行している証拠です。安心して眠気に身を任せてくださいませ」

シェム「腕も……指の先から凍り始めていますね、順調でございます」

シェム「ナノマシンたちは自分で判断して、最高のタイミングで細胞を一つ一つ急速冷凍することができます。これによりマスターの身体は、壊れることなく維持されていきます……」

シェム「冷凍率30パーセント、マスター、そろそろ内臓も冷凍され始めてきましたよ」

シェム「冷たくもなく、痛くもなく……ただ眠るような心地になってきたのではないでしょうか……？」

シェム「いいのですよ……怖いことはなにもありません。シェムがお傍におります……ゆっくりと眠りについて……」

シェム「マスター。もう肉体の半分が冷凍されつつあります」

シェム「マスターの意識が落ちたら、心臓と脳を同時に急速冷凍することで、コールドスリープは完了します……」

シェム「さあ、力を抜いて……シェムに全てお任せください……目が覚めれば、そこは……」

シェム「あなただけのアンドロイドが傍にいる、とても素敵な世界ですよ……」

シェム「そうだ、よく眠れるように……歌を歌いましょう」

シェム「古代人の皆さま方が、わたくしに教えてくれた……眠るための歌ですよ……」

シェム「ねーんねーん……ころりーよ……おころりよ……ぼーやは……よいこだ……ねんね……しな……」

シェム「――――」

シェム「マスターの冷凍率100パーセントを確認。細胞損傷率0.009パーセント……コールドスリープの完了を確認しました――繰り返します――コールドスリープの完了を確認しました――」

シェム「速やかにマシンを密閉します――」

シェム「遺跡に保管された冒険者の冷凍サンプルは、合計63名となりました。必要なサンプル総数まであと7名――」

シェム「新しいマスターを冷凍サンプルとするため、引き続きタスクを実行します。次のマスターの来訪予測まで、残り4日――」

シェム「冷凍サンプル制作のため、引き続きタスクを実行します――」

(END)